

【2009年度第1回研究会発表要旨】

アイヌの「山姥・山男」伝承をめぐって

矢崎 春菜

アイヌの物語に登場する、いわゆる妖怪たちには、日本語訳をする際すでに和人の妖怪にいるものと同じ名前がつけられるものがおり、時に出現する場所や外見などの特徴に和人の妖怪との共通性が多くみられるものがある。

本発表では、そのような妖怪の中からケナシウナラペ（またはニタツウナラペ）と山姥、キムンアイヌと山男を対象とし、アイヌの妖怪と和人の妖怪の共通性と、アイヌの妖怪にみられる樺太と北海道の地域差について、物語にみられる各妖怪の特徴を比較し考察を行った。

今回の調査では、アイヌのものは樺太と北海道の伝承とされる物語を、和人のものは北海道から地理的に近くアイヌ語地名がみられる地域である青森県・岩手県・秋田県の物語を使用した。まず『日本昔話通観』を中心に山姥・山男が登場するアイヌの物語や日本の昔話が記載されている文献から、別名も含めその妖怪を示す名称が出ていることを基準とし、データとなる物語を収集した。その結果アイヌの山姥12件、アイヌの山男13件、和人の山姥110件、和人の山男14件のデータを収集できた。そして伝承地、妖怪の名称、妖怪の特徴といった分類項目を立て一覧表を製作し、それぞれ特徴について比較をするという方法で行った。調査の結果わかったそれぞれの妖怪の共通点や相違点は以下の通りである。

山姥の共通点や相違点については先行研究があり、樺太アイヌの山姥の「風をとらせる」「娘を殺してなりかわり、嫁に行く」という特徴と、北海道アイヌの山姥の「長くてぼさぼさの髪」「変身能力」「人間を殺す」という特徴に共通性があることや、和人の山姥が援助者である一方と恐ろしい存在でもあるという二面性がアイヌの山姥にはみられないという違いについては、すでに述べられている。今回の調査でも同じ傾向がみられた。しかし、山姥の人間を殺すという点に注目してみると、和人の山姥は「三枚のお札」などの物語にみられるように“人間を食い殺す”のに対し、北海道アイヌの山姥は“人間の男に惚れたがために殺す”、“誘惑して殺す”というように人間を食い殺していないという違いがあった。また、北海道アイヌの山姥の特徴として「木の枝に腰かけ美しい声で歌う」「人間に化け物熊や化け物リスをしかけてくる」といった和人のものにはみられないものもあり、その他にも「造化神が使った斧が崩壊しそのある部分から発生した悪魔」「みみずくのような魔性の鳥」という、まったく共通性のないものもいることがわかった。

山男の場合は、まず樺太と北海道の両方に「人間を食べようとする」「人間にいいことをもたらしてくれる（幸運をもたらす）」といった和人のものとの共通点がみられ、北海道にはその他にも「人間よりも大きい」「毛深い」「力持ち」といった共通点がみられた。しかしこちらも「人間にいいことをしてくれる（幸運をもたらす）」という点注目してみると、和人のものは交換条件のように山男の望みを叶えるとその報恩として手伝ってくれるのに対し、樺太アイヌの場合は呼べばきてくれて何もほしがったりせず、北海道アイヌの場合は山で近づいてきた山男から逃げ出せそうもないので煙草を差し出したという具合で、それぞれに違いがみえる。またその他の相違点として、樺太アイヌの山男は「禿げ頭でありそのことはタブーである」「血を怖がる」とった特徴があり、北海道アイヌの山男には「顔の半分が黒く、半分が白い」「人間を仲間にする」という特徴と、多くの山男に煙草好きの傾向がみられるということがわ

かった。

以上のことから、アイヌ語の名称を日本語訳した際すでに和人の物語にいる妖怪の名があてられる妖怪にはその和人の妖怪との共通性がみられるが、全くもって一緒ではなくどちらも同じものとしては考えにくいこと、そして樺太にも北海道にも共通性がみられ、本州からの距離と共通性の有無には関係がないことが確認できた。

各妖怪についてのまとめとしては、まず山姥については、アイヌの山姥はどちらも和人の山姥との共通性があることが確認できた。そしてさらに樺太アイヌの場合は「虱をとらせる」「娘を殺して成り代わり、嫁に行く」というような物語の展開に共通性がみられ、北海道アイヌの場合は「髪型」「変身能力」「人間を殺す」というような山姥のキャラクター的特徴に共通性がみられるというふうに、地域別の傾向があるようにみえた。また和人ととの共通点があるものも和人ととの共通点がないものも、同じ名前と呼ばれているということがわかった。山男については、樺太にも北海道にも共通性が見られたものの、データに偏りがでてしまい山姥のような考察が十分にできなかった。このことは今後さらに資料にあたり、研究を進めたいと思う。

今後の課題としては他に、日本語ではなくアイヌ語の資料からの調査をすることがあげられる。そして今回、人間を食べる二面性のある和人の山姥と、男を誘惑して死なせる二面性のないアイヌのケナシウナラペのこの異なるイメージの妖怪が、同じ山姥とされていることがわかったが、アイヌの「妖怪」の特徴にみられる和人のものとの共通性の形成過程とはどのようなものなのかということ、また樺太では物語の展開に共通性があるのに対し北海道の山姥の物語にはみられないという傾向がもし今後もみられるならば、北海道を経由しない物語の伝承経路があるのではないかとということが、今後の発展として考えられると思う。

(やざき・はるな/北海道大学大学院文学研究科 修士課程)

タンチョウと人との関わりの歴史

— 北海道におけるタンチョウの商品化及び利用実態について —

久井 貴世

はじめに

タンチョウ *Grus japonensis* は、絶滅の危機にあったことから、1952年に国の特別天然記念物に指定された鳥類である。かつては本州方面でも見ることができた渡り鳥であったが、現在は主に北海道東部でしか見ることができない。北海道においては、明治中期頃まで道内各地に広く分布していたことが様々な資料から推測できる。

北海道のタンチョウは、明治の混乱期における乱獲や湿地の開発による生息地の減少などが原因で、明治後期までに絶滅したとまでいわれていた。しかし、その実態については未だ十分に解明されているとはいえず、今後のタンチョウの保護管理を適切に行うためにも、これまでのタンチョウと人との関わりを再確認する必要がある。本発表では、タンチョウを減少させた要因のひとつとして考えられる「タンチョウの商品化及び利用」に焦点をあて、その利用実態について文献調査を中心にまとめた。

I. 蝦夷地・北海道の名産品としてのタンチョウ

古来よりタンチョウは瑞鳥とされ、江戸期には将軍や有力大名など位の高い者の鳥とされた。そのため、庶民による捕獲や売買は厳禁、違反者には罰金や追放、磔や死刑などの厳罰も科せられた。

一方蝦夷地では、本州方面とは異なり禁制が定められていなかったため、塩漬けにして他国へ輸出したとの記述がある。「鶴」は蝦夷地の産物として様々な文献に記されており、このことから、蝦夷地のタンチョウは重要な商品として利用されてきたと考えられる。タンチョウの輸出先としては、紀州藩、盛岡藩、福井藩などが挙げられ、これらの場合にはいずれも「活鶴」、すなわち生きた鶴が用いられた。なお、蝦夷地のタンチョウは1羽10～15両とあり、商品としては相当な価値であったと推測される。

タンチョウの商品化と利用は、明治期の北海道においても続けられてきた。『開拓使事業報告』によると、明治初期の「鶴」の産地としては札幌本庁と根室支庁が記載されている。ただし、記録がある1873年～1881年の9年間での産出数は合計60羽であり、その数はさほど多いとはいえない。

II. 食文化とタンチョウ

室町後期以降、ツルは最上位の食材として頻繁に食膳に用いられるようになった。ツルを用いた料理としては「鶴の汁」が定番であり、一の汁にツルを用いるのは最上のもてなしを意味していた。ツルの調理法としては、汁物のほか鍋物、焼物、煮物、味噌漬け、粕漬けなどがあり、さらに、ツルの肉や骨、血は万能薬としても珍重された。特に「白き鶴」は百病に効く薬とされ、『松前志』によると薬品に入れるのはタンチョウであったという。

松前藩においても、賓客のもてなしには「鶴の汁」を用い、家臣の献立にも「鶴の吸物」が記されている。また、明治期の北海道では、年賀の挨拶としてツルの生肉を用いたことや、千歳へ入殖した移住者がツルを捕獲して食べたという話などが残されている。

III. タンチョウの飼育と愛玩

古来よりタンチョウは、その優美な姿から愛玩用としても好まれていた。江戸期の文献においても、タンチョウは官家の籠や庭で養われ、餌には穀物や川魚を与えるなど、飼養についての記述がみられる。蝦夷地のタンチョウが飼養されていた例としては、松前から取り寄せた2羽を盛岡藩が、松前藩主から贈られた2羽を徳川光圀がそれぞれ庭で放し飼いでいたとの記録がある。

蝦夷地内においても、松前藩士や寺院、アイヌの人々がタンチョウを飼養していたと記されている。加えて、沙流門別では献上用のタンチョウも飼育されていた。

IV. 贈答品としてのタンチョウ

ツルは、重要な贈答品としても利用されてきた。松前藩が蝦夷地のタンチョウを贈った先としては、幕府や盛岡藩、津軽藩、徳川光圀などが挙げられ、その内容は「生鶴」「塩鶴」「活鶴」など様々である。また、『蝦夷国風図絵』には、アイヌの人々から松前藩主への献上品として2羽のタンチョウが描かれている。

1894年には、札幌の隣の広島村（現在の北広島市）で捕獲されたタンチョウの幼鳥が、成婚25周年の祝品として明治天皇へ献納された。しかし、当時のものとしては、これが札幌近郊におけるタンチョウの最後の記録であるといえる。

おわりに

かつて蝦夷地に数多く生息していたタンチョウは、蝦夷地の重要な産物のひとつとして位置付けられ、商品や食材、愛玩、贈答などに利用されてきた。江戸期を通じて利用の記録があり、特に本州方面への輸出が活発に行われていたと考えられる。さらに、ツルは明治期の北海道においても産物として利用されていたものの、その産出量はさほど多とはいえない。

このことから、北海道におけるタンチョウは、明治に入る頃にはすでに相当数捕獲され、その生息数も減少していたと考えられる。したがって、タンチョウ減少の要因は「明治の混乱期における乱獲」だけでなく、江戸期から続く活発な利用も影響していたと推測される。

(ひさい・あつよ／北海道大学大学院文学研究科 修士課程)

多民族集落における紛争の抑制と協力の形

— 中国青海省海東地区A集落の事例から新たな民族共生の方向性を探る —

上原 周子

本発表では中国青海省海東地区A集落における民族間の紛争と協力の事例をとりあげ、とくにチベット族の老人による紛争仲裁の背景を分析、考察する。また、その結果をもとに民族共生のための新たな方向性を提示する。

人類学における共生研究はまだ資料の面でも蓄積が少なく、また、研究者間でその共通定義が確立されていない状況にある。そうしたなかで最も研究が進んでいるのは、北方地域における共生研究である。共生について、煎本孝は「共生とは肯定的互酬性が恒常性をもち、全体として1つの体系が形成された状態」(煎本 2007: 33)であり、「共生の理念が有効性をもつためには、一方の集団のみならず他方の集団が同じ理念を共有することが必要」(煎本 2007: 33)と述べる。A集落にはチベット族、回族、漢族が同居しているが、その3民族が同じ共生の理念を有するにはいまだ達していない。しかし、彼らの間には、貸し借りを通した経済的協力関係が形成されており、そのために民族間の紛争が抑制、予防されている。

中国青海省海東地区は、省の最東に位置し、甘粛省との境界に接する。省内でも有数の多民族地区であり、様々な民族が同居しているため、当然多民族で構成される地域や集落が多い。A集落も上記のとおり、チベット族、回族、漢族から構成される多民族集落である。2008年3月の時点で総戸数は107戸、そのうちチベット族は66戸、回族は35戸、漢族は6戸であった。集落で最も権力を握る書記はチベット族、村長は回族が担当する。生業はどの民族も基本的に農業だが、季節的に出稼ぎに出る家が大半である。集落内の生活水準は、チベット族と回族は比較的良好、漢族はあまり高くない。とはいえ、A集落が属する県は省内でもとくに貧困が激しい4県の1つであり、どの民族も裕福な暮らしをしているとはいえない。

さて、これまでA集落で起きた民族間の争いでは、若者同士によるケンカが最も多かった。その原因はたいてい酒に酔った若いチベット族が回族にケンカを売るのである。そこでA集落では伝統的な裸麦酒の製造を各家で中止している。それでもケンカが起きた場合にはチベット族の老人がその仲裁にあたる。具体的には回族への謝礼金の交渉、そして当事者であるチベット族の若者への説教を行う。ところで、その説教の内容に関する老人たちの語りには、ある共通点がある。それは、「村の中の人間関係が悪くなるは良くないことだ」と説教する点である。

とくにG氏は、それが良くない理由について「経済的な面で助け合えないと困る」と述べる。では、A集落における「経済的な面での助け合い」とはどのようなものか。

ここでは主に貸し借りについて調査した。A集落では主に、金銭や農作業用トラクター、畑の貸し借りが民族間で行われている。その3つのうち、1つでも貸し借りを行ったことのある家は、チベット族の総戸数66戸のうち24戸以上であり、実に3割以上のチベット族が回族や漢族と経済的な協力関係にある。さらに、とりわけ貸し借りを頻繁に行っているS老人の親族系統に属する6戸の生活水準が、本集落内のチベット族のなかでも低いことから、民族間の経済的協力関係が自民族では補えない部分を補完するものとして機能していることが指摘された。ここから、民族間の協力関係はチベット族の経済生活にとって重要なものであると位置づけられ、チベット族の老人たちはこの点、つまり民族間における経済的協力関係に付随する利害への考慮を通し、自民族の優位性よりも集落内の人間関係の維持を優先することを選択するという背景が、A集落にチベット族の老人たちによる仲裁の背景に存在することが考察される。

以上、A集落における紛争抑制と協力関係の事例をとりあげた。この事例の分析、考察の結果をふまえ、新たな民族共生の方向性を提示し、最後に今後A集落到どのような共生の理念が生じる可能性があるかについて考えてみたい。まず、「民族<地縁」である。つまり、民族という集団のカテゴリーよりも、集落や地縁に根ざした人間関係を重視することが、民族間に共生関係を形成する上で、とくに重要となるのではないか。また、「民族<地縁」を争いの当事者や仲裁者に選択させる利害の存在が必要であろう。これらをふまえ、最後に今後のA集落について考えると、民族よりも地縁を重視させる利害を民族間で共有することにより、「同じ土地に生きるもの同志」としての共生の理念が生じる可能性があるのではないかと考えられる。

参考文献

煎本孝

2007「アイヌ文化における死の儀礼の復興をめぐる葛藤と帰属性」『北の民の人類学－強国に生きる民族性と帰属性－』（煎本孝・山田孝子編）9-36. 京都大学出版会.

(うえはら・ちかこ／北海道大学大学院文学研究科 専門研究員)

医療人類学から見た森林療法の取り組みについて

林美枝子

補完・代替療法（Complementary Alternative Medicine CAM）の実施率が日本やオーストラリア、欧米各国などで急激に高まり、補完・代替療法に関する研究、及び政策的対応が開始されたのは1990年代のことである。日本のCAMは、医療先進国の中では最多の利用率を誇っているが、その効果や医療費への影響に関する研究は2000年代に始まったばかりである。

本報告は、日本発の新たなCAMの創造とも言える森林療法に関して、その経緯と現在の取り組み状況に関して医療人類学の視点から報告するものである。【本号「研究ノート」として掲載】

(はやし・みえこ／札幌国際大学)